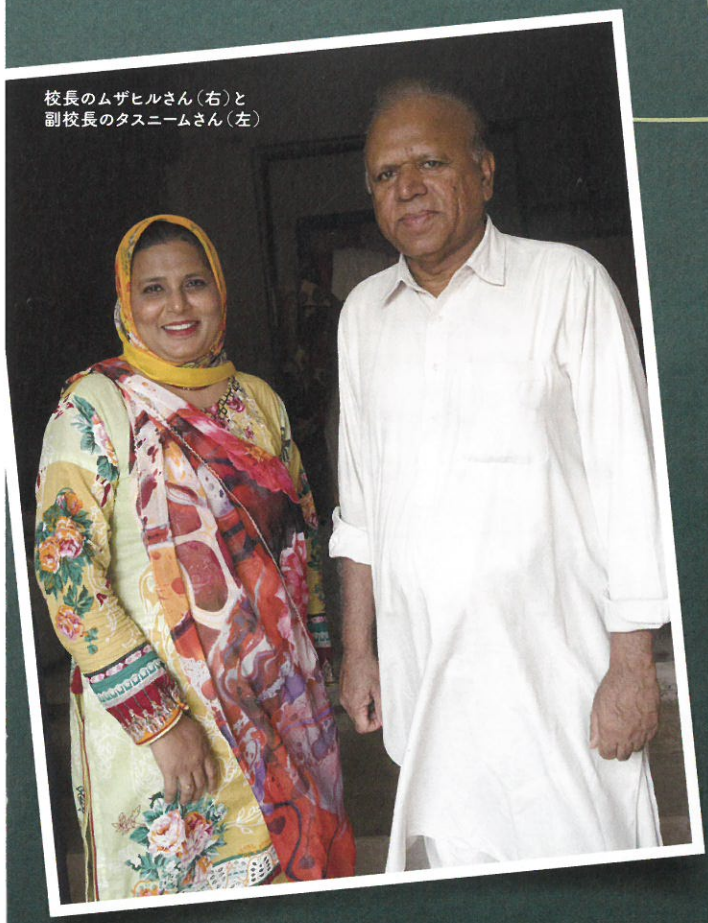
支援の現場から

アル・カイールアカデミー ムザヒル先生

「教育とともに子供たちの心の中を知ることを大切にしています」



校長のムザヒルさん（右）と
副校長のタスニームさん（左）

ムザヒル先生が自身で学校を設立したのは1987年のこと。大学在学中からスラムの子供たちに教科書を無料で配るボランティアをしていましたが、スラム地域ではインフラや勉強できる環境自体が整っておらず、学校そのものの必要性を感じて、ゴミ捨て場にバラックを作り10人の生徒とスタートさせました。

立ち上げ当初は、資金調達の問題や、地域の人たちから活動に対する理解が得られず、反対する人たちの妨害もありました。親自身が読み書きのできない人が多く、教育の意味は簡単には理解されませんでした。子どもたちには学校へ行くよりむしろ家計を助けるために働いてほしいという気持ちが強かったそうです。

ムザヒル先生は親たちに教育の必要性を根気強く説きつづけ、その結果、学校で学ぶ子どもたちは徐々に増え、今では、学校運営は地元の人々からも認められるようになっています。

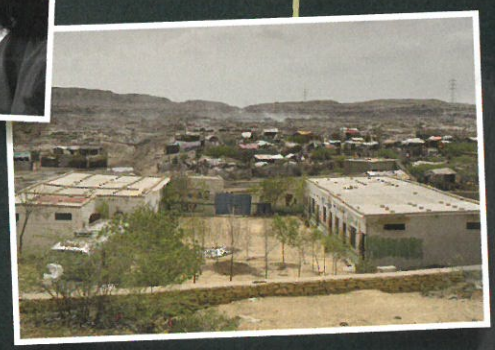
「学校で学ぶことや、先生や友人と触れ合う機会を通して、生徒たちが自分で考える力、善悪を判断できる能力を身に着けていくことが本当の教育だと思います」とムザヒル先生は言います。

「そして、子どもと話しながらじっくり様子を見て、心の中を知ろうとする事も大切にしています」それは虐待を受けている子や、スラム出身ということによる差別で、自分は誰からも関心を持たれていないという不安を抱えている子も多く、心のケアも必要だと感じているからだそう。「勉強を教えるだけでなく、子どもときちんと向き合うという信念が、他の先生にも引き継がれていってほしい」と、教育に対する熱い想いは止まることなく未来へと向かっています。

「真剣な眼差しで先生に教えてもらう生徒」

休憩時間に笑顔だった子どもも授業になるととても真剣。学校を卒業した生徒には、大学に進学する子や薬剤師になった子も。また自分が学んだこの学校の教師として戻ってくる子もいます。

「ゴミ捨て場の中にある学校」



現在は、校舎が9つ、生徒数は約4500人。生徒はすべて無料で学んでいます。もっとも大きい校舎には、2500人が通っています。校舎の一つ、第二分校があるのは、ゴミ捨て場の中。ゴミの中からお金になるものを探して生活をしている家族の子どもたちが通っています。

送っていただいた古着が活用されるまで

宅配便や郵便で直接JFSAに発送していただきます

JFSAで選別
2割は日本国内で販売し活動に利用されます